

単元名 「市川三郷んちゅぬ宝を深く知ろう町づくり」（第1学年 町づくり）

■本事例のポイント

- 探究の過程が繰り返されるような単元構想をすることで、生徒自らが問いを立て、情報収集、分析を繰り返した。
- 生徒が自身の変容を振り返ることができるよう、節目で「市川三郷町はどのような町か？」と繰り返し問うた。

■単元の目標

市川三郷町における探究活動を通して、伝統や産業に携わる人々には思いがあることを理解し、複数の情報を比較したり関連付けたりしながら解決に向けて考えるとともに、自分たちも地域の一員だという自覚をもち、自分事として実社会の問題解決に取り組むことができる。

■単元の指導計画（28時間）

第1小单元「市川三郷町とは①」

- アンケートでレディネスや意欲を測る
- ウェビング

第2小单元「探究課題と出会う」

- 道徳 「自分の地域の宝って」
- 学活 町内めぐりの目的
- 町を知ろう① 町の魅力概要
- 町を知ろう② 町が抱える課題
- 「自分が知りたいことは何か」（KJ法を活用）
- 見学地決定・事前調べ
(さんスタ、ホームページ、本など)
- 調査すべきこと、知りたいことの整理
- 町内めぐり



町内めぐりで知りたい情報について、生徒が繰り返し見直すことで、質問の質が高まった。

第3小单元「市川三郷町とは②」

- 見学してきたことの整理（KJ法を活用）
- 新たに浮かんだ疑問について、事業所に電話して情報を収集
- 見学場所をワールドカフェ形式で発表
- 写真を使い、自身の考え方や感じたことを共有
- 「すべての事業所で聞いてきたこと」の分析

第4小单元「視点を自分に変えて、地域の捉え直し」

- 「地域住民として、私たちはどうあるべきか」
- 地域活性化のために活動しているNPO「ぼくまち」の活動についての情報を収集
- 「ぼくまち」関係者を招いて、直接質疑応答

第5小单元「自分たちにできること」

- 自分たちにできることの分析
- 「市川三郷町とは」（二度目のウェビング）
- 成果物の作成→町のイベントで掲示

■本時の概要

目標

地域の担い手は自分たちであると気付き、自分なりに地域のためにできることを考えることができる。

流れ

- ①「ぼくまち」に参加している生徒の様子を動画で視聴する。
- ②ゲストティーチャーへ質疑応答をする。
→途中、グループで協議する時間を設ける→もう一度質疑応答
- ③「地域住民として、私たちはどうあつたらいい?」という問い合わせについて、
生徒一人ひとりが考える。
- ④「市川三郷町とは?」という問い合わせについて考える。

注:「ぼくまち」…市川三郷町にゆかりのある若者が作った団体。中学生から20代が所属しており、町の魅力向上や地域活性化を目指し、様々な活動を行っている。



ゲストティーチャーを招き直接質問することで、
自分たちに必要な情報を収集できるようにした。



生徒の感想

- 地域のことを知ったから、地域のためになることをしたい。
- 町のことを知ることで町を大切に思えるようになった。大切に思えないと、何かを始める気にはならない。町を明るくするために、「ぼくまち」でイベントをやってみたい。
- 「ぼくまち」をサポートしたい。自分は習い事があって活動できないけど、とてもすごい活動をしているから。



一度、聞いた内容を共有したり、聞きたいことを整理したりする時間を設けた。そうすることで、生徒の中で情報の整理・分析ができ、探究的な学習を発展させていくことができた。



今まで他人事のように町のことを感じていた生徒たちですが、町内めぐりや本時を受けて、「自分」が主体となって町について理解をしている様子が見られました。

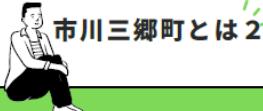
■学習調整をしている子供の姿

第1回目(学習前)



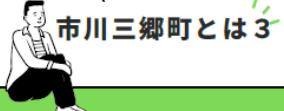
田舎

第2回目(町の宝を学習後)



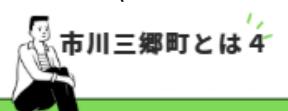
歴史がある町

第3回目(町の現状学習後)



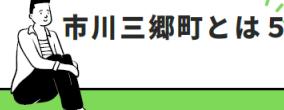
良いところもたくさんあるけれど課題も多い

第4回目(町内めぐり後)



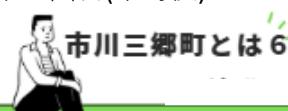
たくさん問題があって苦労していることが多いけど、問題解決のために動いている人達がいる町。

第5回目(町内めぐりの分析後)



歴史や伝統が多い町有名なものがたくさんある町

第6回目(本時後)



若者も、高齢者も地域のために頑張っている町
色々な所がつながっている町

■指導と評価の工夫①

①「市川三郷町とは？」という問い合わせ学習のまとめごとに問う。

- *生徒にとっては、自身の変容に気付くことができる。
- *教師にとっては、生徒が「どう考えているか」という現状が分かる。
- ・あえて、同じ問い合わせを続けたことで、変化を見取ることができた。さらに、それを学級全体で共有することで、地域の捉え方がどんどん変化していった。
- ・単元を通して「市川三郷町とは○○な町である」という理解や、「なぜそう思うようになったのか」という理由が明確になっていった。

交流している様子



「最初の頃と今では、書きたいことが全然違う。」とつぶやく生徒がいた。



第7回目(仲間との意見交換を経て)

まとめ



学習感想

市川三郷町は最高の町
理由は有名なものがたくさんあり自然豊かで町の人全員優しいから

自分の知りたいことをここまで追求するのは初めてだからとても楽しかった。質問をする力や、人と話す力もつけられたと思う。

■学習調整をしている子供の姿



最初の頃は、「はんこ」「花火」「和紙」など名前を知っているだけだった。

■指導と評価の工夫②

②探究の過程が繰り返されるような学習展開を意識する。

- *生徒にとって、知りたいことを追究する上で、浮かんだ疑問の答えを導き出すために、更に情報収集し、粘り強く学習することの意義を感じられる。自分たちの言葉がその後の学習に生かされることで、学習したことの有用感が高まる。
- ・町内めぐりでインタビューすることができなかつた内容は、後日電話で問い合わせをした。
- ・それぞれの見学地で調査した共通の質問について学級全体で共通点がないか分析した。
- ・その内容を基に、新たな問い合わせを立て、その問い合わせに答えるゲストティーチャーを呼んだ。ゲストティーチャーは生徒の問い合わせに真摯に向き合って話をしてくれたため、生徒達が主体的に問い合わせを解決していく時間となった。



見学後は、「なぜそれらが残されているのか？」人々の思いや努力があることを理解した。



■成果（○）と課題（▲）

- 生徒自身が自ら問い合わせを立て、情報の収集、整理・分析を繰り返すことができた。
 - 名前しか知らないかった町の製品に対して、その背景にある生産者や事業者の思いに気付くことができた。
 - 単元を通して、生徒が地域に住む一員であることを自覚し始めた。
- ▲時間割の工夫や調整が必要。